

東京農業大学
拓友会ニュース

第41号・2025年9月30日発行
発行所 **東京農業大学拓友会**
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
TEL.03-5477-2918 FAX.03-5477-2947
e-mail : takuyu@nodai.ac.jp
<https://www.nodai.ac.jp/academics/int/int/takuyu/>

拓友会ニュース41号 目次

- P2 …… 国際農業開発学科70周年記念の年に
P3～P6 …… 2024年度 東京農業大学国際農業開発学科 卒業論文拓友会賞
(論文推薦書+受賞者のことば)
P7 …… 今年度で退職する教員の挨拶
P8～P9 …… 今年度着任された新人教員の挨拶
P10 …… 会計報告
P11 …… 学科教員・学生の受賞記録(学会賞など)
現在の学内の様子(国際センター,サイエンスポート)

東京農業大学国際農業開発学科
創設70周年記念式典・祝賀会のご案内

すでにHPにてご案内の通り、
下記の通り学科創設70周年記念式典・祝賀会を開催致します。

記念式典

日 時 令和7年11月1日(土) 午後2時～
会 場 東京農業大学世田谷キャンパス 国際センター 榎本ホール

記念祝賀会

日 時 令和7年11月1日(土) 午後3時～
会 場 東京農業大学世田谷キャンパス 国際センター カンファレンスルーム1・2
会 費 10,000円

参加申込方法

Forms (QRコードを読み取り)にてお申し込みください。
※令和7年9月30日(火)まで



国際農業開発学科70周年記念の年に

東京農業大学名誉教授 大田 克洋（拓殖6期）

昭和36年（1961年）4月に、農学部農業拓殖学科第6期生として、世田谷区桜丘1丁目の現キャンパスに入学し、65年の卒業と2か月遅れの6月からの助手としての奉職以来、農大、そして学科の発展史と、小生の人生行路は分離不可能に重なり合うものとなりました。私事ですが、助手、講師、助教授、教授を各10年間勤め、平成20年（2008年）に、65歳定年退職により名誉教授に任ぜられ、今日に至っている次第です。

質実剛健の農大人生ともいえる行路は仄の日もありましたが、大部分は荒波にもまれる日々であったように思い起こされます。その中で、学科としての節目の事業も何度か経験・・・というより当事者としてかわったいくつかのイベントがあります。

1つは、昭和59年（1984年）の学科創設30周年記念事業の一環として企画された「東京農大拓友会」の「再発足」計画でした。「再発足」の文字が示すように、紆余曲折を経た後の再出発でした。それでも翌85年には、完全？白黒印刷の「拓友会ニュース」が創刊され、その後、今日の電子版・フルカラーの第41号発行へと継続してきたことはGood Job!以外の何物でもないことです。

教学関係で、強く印象に残っている出来事は、沖縄県宮古島での「宮古亜熱帯農場」の開設でしょう。近くの東平安名崎

（ひがしへんなさき）の絶景と共に心に残るホットスポットになっています。

また、平成2年（1990年）4月の国際農業開発学専攻修士課程の開設と、つづく平成14年（2002年）4月の大学院国際農業開発学専攻博士後期課程の開設も学科発展の大きな跳躍台になったのではないかと、当時の担当者の一員として自負しているところです。これにより、学科は独自の「博士（国際農業開発学）」の称号を授与することが可能になったわけですから（注：令和2年（2020年）4月入学者から博士（農学）に統一）。

学科としての特別な事業のもう1件としては、平成18年（2006年）の「国際農業開発学科50周年記念」事業があります。

学科の50周年記念は、平成3年（1991年）に、学科の名称が「農学部農業拓殖学科」から「国際食料情報学部国際農業開発学科」に改称された後の行事であったため、「国際農業開発学科50周年記念」の名称が使われていることはご案内の通りです。

50周年の記念事業以降、国内外の社会経済的諸事案の大波と、幾多の自然大災害の激波に立ち向かいつつ、本年は早くも「学科発展の70周年」の節目を迎えていることは、ご同慶の至りにございます。関係各位の益々のご健勝とご発展を祈念しつつ、パソコンの電源を落とすこととします。

2024年度 東京農業大学国際農業開発学科卒業論文 拓友会賞

— アブラナ科野菜圃場における 共栄植物の混作が節足動物群集におよぼす影響 —

熱帯作物保護学研究室 倍野 留実
指導教員 足達 太郎

共栄作物とは、ちかくに栽培することで
たがいの成長にいい影響をあたえる植物
のことで、「コンパニオンプランツ」ともよ
ばれる。特定のハーブ類を野菜と混作す
ると、病害虫をふせいだり、害虫の天敵を誘
引するなどの効果があることが経験的に
知られている。しかし、科学的に立証され
ている例はすくない。

昆虫化学生態学などの研究成果によれ
ば、植食性の昆虫や節足動物の寄主選択
にかかわる定位・定着・摂食・産卵といっ
た行動は、植物がもつ形・色・におい・味
といった物理的・化学的因子によって制御
されている。これは種特異的な昆虫・植物
間での相互作用であるため、ある植物に対
して特定の昆虫は誘引されるが、別の種の
昆虫はこれを忌避するといったことが普通
に生じる。

圃場にはさまざまな種の害虫やその天
敵が共存しており、特定の共栄作物をすべ
ての害虫が忌避したり、すべての天敵が特
定の共栄作物に誘引されるわけではない。
しかし一般には、一部の共栄植物が害
虫全般をとおざけたり、それらの天敵を一
括して誘引するかなのような言説が流布し
ている。周知のとおり、野菜類では害虫の種
類が多岐にわたるため、その点について検
証した研究はこれまでほとんどなかった。

そこで本研究では、さまざまな節足動物

が複数の共栄作物からうける影響を検証
するため、圃場試験をおこなった。試験で
は、和製ハーブとして知られ、多くの害虫
種が忌避するとされるシソ科植物のエゴ
マと、天敵誘引植物として知られるムラサ
キ科のポリジを共栄作物に採用し、アブラ
ナ科野菜のコマツナと混作した場合に圃
場に生息する節足動物群集の個体群動態
を調査した。

調査の結果、エゴマとポリジの混作は、
植食者であるコメツキムシ科の一種やダイ
コンハムシ、雑食者であるウスモンミドリカ
スミカメなど一部の節足動物の個体群動
態に有意な影響をおよぼした。しかし、ほ
かの多くの節足動物では、エゴマとポリジ
の交互作用のため、個体群動態に顕著な
変化はみられなかった。このことから、共
栄作物が節足動物群集にあたえる影響は
複雑であり、共栄作物どうしが相乗効果を
もたらすこともあれば、相殺作用によって
効果がうちけされることもあることが示唆
された。

著者は、大学生活の総まとめである卒
業論文研究に、あえて困難な圃場試験を
えらんだ。所属する熱帯作物保護学研究
室では管理する試験圃場がなかったの
で、熱帯園芸学研究室に協力を依頼し、
圃場の耕起や播種、育苗、移植、施肥など
も両研究室の教員や学生のたすけをかり

ながら、すべて自分でやりとおした。こうした試験遂行にかかわるマネジメントは研究においてすこぶる重要である。移植した苗が活着しないなどのトラブルや、炎天下で

の調査など苦労も多かったが、忍耐づよく研究を完成させたことは称賛に値する。

以上の理由により、本論文を優秀論文として推薦する。

受賞者のことば

倍野 留実

このたび、私の令和6年度国際農業開発学科卒業論文に対し「拓友会賞」をいただき、驚きとともに、素直にうれしく感じております。熱帯作物保護学研究室の先生方、先輩方、同期、後輩の皆さまには大変お世話になりました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

卒業論文では、「アブラナ科野菜圃場における共栄植物の混作が節足動物群集におよぼす影響」をテーマに研究を行いました。アブラナ科野菜は害虫の被害を受けやすく、商品価値の低下を招きやすい作物であること、そして近年、生物多様性の保全や農業の持続可能性が重視されていることを踏まえ、共栄植物との混作が圃場内の節足動物群集にどのような変化をもたらすかを調査し、害虫抑制や殺虫剤使用の低減につながる可能性を検証しました。実験では、アブラナ科野菜のコマツナのみを栽培した単作区と、共栄作物としてエゴマおよびポリジを組み合わせた混作区を設け、両区における節足動物の種数と個体数を比較しました。

研究を始めた当初は、農作業の経験も乏しく、三種類の作物を同時に管理することに不安を感じていました。施肥や水やりの方法を作物ごとに調べ、試行錯誤を重ねながら進めましたが、露地栽培ならではの

の天候や雑草の影響により、思いがけないトラブルも多く発生しました。そのたびに、多くの方々に支えていただきました。特に、他研究室の先生方からいただいた助言や、真夏の炎天下で圃場作業を手伝ってくれた同期の仲間たちには、心から感謝しています。

結果として、共栄作物による明確な誘引効果や忌避効果の特定には至りませんでした。植物の多様化が節足動物群集に一定の影響を与える可能性が示されました。化学農業に依存しない有機栽培を安定して実施していくうえで、今後も混作の効果に関するさらなる研究が求められると感じています。今回の研究が、有機農業の普及に少しでも貢献できれば幸いです。

コロナ禍で始まった大学生活でしたが、家族や先生方、そして学生時代に出会った仲間たちの支えの中で、充実した4年間を過ごすことができました。これからも、学生時代に培った継続力と柔軟性を活かし、さまざまな課題に前向きに取り組んでいきたいと思っています。

— マレーシアペラ州の水田地帯における カワウソの糞場選択に影響を与える要因 —

熱帯作物保護学研究室 加賀屋 小波
指導教員 和久 大介

マレーシアはイギリスなどからの独立以降、食料自給率を上げるために農業の喚起策を行い、パームヤシ以外の比較的大規模な農業地帯が存在する。これらの農業地帯では灌漑用水が発達しており、川や湖などから直接水が引かれている。水源から直接灌漑用水を引いているため、必然的に多くの水生生物が生息しており、それらを捕食する生物も生息している。その捕食者の一つがカワウソである。

マレーシアにおいてカワウソは保護対象であるものの郊外では比較的身近な存在で、マングローブ林や河川などの周辺では人間の生活道路でよく糞をする程度に生息している。他のアジアでは人間の身近に生息しているカワウソたちの生息環境要因が調べられているが、マレーシアではこれまで調べられていなかった。

論文著者の加賀屋さんはマレーシアでの調査許可を得たうえで、調査地に合計33日間滞在し踏査調査を行った。踏査調査ではカワウソの糞を発見した地点とその周辺環境を記録した。特に水田地帯の灌漑用水路ならではの時期による水深の関係性に着目し調査を行った。調査の結果30地点でカワウソの糞を発見した。

糞を発見した30地点のデータと、解析のためにランダムに選択した同数のポイント合計60地点のデータを用いてロジスティクス回帰分析を行い、カワウソの生活に係る環境要因を推定した。その結果、水

路の水深や河川からの距離とはあまり関係がなく、インドで行われた先行研究と同じように水門から近い場所が最も糞をされている場所であることが分かった。水門がある場所は水の止まる場所であり魚がたまりやすい場所である。このことから、カワウソも魚がたくさんいて捕まえやすい場所を利用している可能性が高いことを指摘した。

以上のように加賀屋さんは農業地帯における野生動物が生活に利用する環境要因と理由を明らかにした。論文本文には直接見えてこないがマレーシアの農業地帯を研究フィールドとする他学科の教員にアドバイスをもとめたり、現地の学生たちと協力して調査をおこなったりと非常にアクティブに行動していたことも高評価している。そして、論文をみるとわかる通り、英語論文をしっかりと読み込み比較も行っている。これらのことから、加賀屋さんの卒業論文が推薦するにふさわしいと判断し、ここに推薦する。

受賞者のことば

加賀屋 小波

この度は、拓友会賞を頂けたことを大変嬉しく思います。調査や研究において多大なご指導とご助言をくださった和久先生をはじめ、調査許可の取得や現地での調査にご協力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。

私の卒業論文では、「マレーシアペラ州の水田地帯におけるカワウソの糞場選択に影響を与える要因」というテーマで、水田地帯におけるカワウソの生息実態と、彼らが利用する糞場に注目しました。アジアに広く分布するカワウソの生態については、インドやインドネシアなど他の国での研究例は見られますが、マレーシアの農業地域における情報は限られています。そこで私はマレーシアペラ州の水田地帯を踏査しカワウソの糞場を調べ、カワウソの糞場選択に影響を与える環境要因を調べることを目的として調査を実施しました。

調査地が海外ということもあり、調査地に訪れることが出来る期間や回数は限られているため、現地にいる間に何が出来るか考えながら調査することが大変に感じた部分もありましたが、現地の学生と一緒に調査を行えたことも貴重な経験であり、自分自身の成長にも繋がりました。また、卒業論文を執筆するにあたり、ただ自分が研究して得た結果をまとめるだけでなく、様々な論文から自分の卒業論文の目的に合った内容の論文を探して読み進めてまとめることが難しく、苦戦しました。しかし、多くの論文を読み進めていくことで新たな学びを得ることができ、やりがいを感じま

した。自分でテーマを決めて論文を書くというのは初めての経験で不安な部分もありましたが、調査を進めていくうちに、自分の興味がどんどん深まっていくのを感じました。思うようにデータが取れなかったり、分析に行き詰まったりすることもありましたが、試行錯誤しながら解決策を探っていく過程は、とても刺激的で学びの多い時間でした。専門的な知識だけでなく、課題に向き合う姿勢や論理的に考える力を養うことができ、自分自身の成長を強く感じています。

この受賞は、たくさんの人の支えがあったからこそ得られたものです。調査・分析・執筆のすべてにおいて、多くの方の支えがありました。この場をお借りして、改めて深く御礼申し上げます。この経験を今後の学びや仕事に活かしたいと思います。

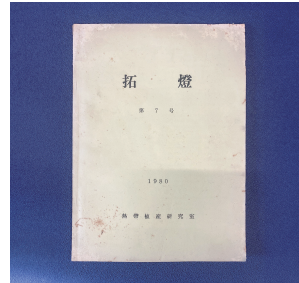
今年度で退職する教員の挨拶

— 世界の平和のために —

志和地 弘信

2026年3月をもって無事に定年退職を迎え、国際農業開発学科から卒業することになりました。歴代の教職員の皆様、また、何よりも教員人生を共に歩いてくださった学生・卒業生の皆様に感謝を申し上げます。私が農業拓殖学科(通称:拓殖)に入学したのは1980(昭和55)年です。入学と同時に熱帯植産研究室(現熱帯作物学研究室)に入りました。その当時、研究室で「拓燈」誌を発行しており、1年生の私が自己紹介で、21世紀の農業を担う覚悟を書いています。今となっては大それた宣言をしたものだと思います。学部生の4年間は研究室、農業実習、拓殖協議会の活動と拓殖学科の実践教育を身に刻む大変な毎日でした。写真は体育祭の綱引きを応援する私です。情景は今と何も変わっていないです。

私が1年生だった熱帯植産研究室には栗田匡一先生がまだ在籍しておられ、確か翌年に退職されました。栗田先生の引越しの手伝いをしていると、栽培学原論の講義原稿を頂きました。手書きの細密な原稿は今読んでも圧倒されます。見るたびに精進しなければと思っています。栗田先生が1964年、1965年にネパール農業学術調査に参加されたことは後になって詳しい経緯を知りました。私は卒業後に青年海外協力隊の農業隊員として1985年ネパールに派遣されました。その後、1997年まで国際協力機構(JICA)の専門家としてネパールの農業開発に関わったのですが、栗田先生が1966年にネパール国ラプティ実験指導農場を開設したことや、この農場がその後にネパールのJICA農業プロジェクトの拠点となったことなどは拓殖学科の強い縁を感じました。その後、農学博士号を取得した私は



JICAから転職して国際機関の国際熱帯農業研究所(IITA)に勤務しナイジェリアにいましたが、2004年に国際農業開発学科に着任して教員としてのキャリアをスタートさせました。

東京農大では宮古亜熱帯農場長を皮切りに、国際協力センター長、大学院農学研究科委員長を務め、その後、学校法人東京農業大学理事、常務理事を務めることになりました。この間、大学や学校法人の改革事業に多くの時間を割かねばならず、学部生・大学院生の指導がおろそかになった点は否めません。開発学科の先生方をはじめ、特に、熱帯作物学研究室の入江憲治、パチャキル・バビル先生には大変なご負担をおかけしました。サポート頂いた皆様に改めて御礼申し上げます。研究では2006年からアフリカのヤムイモの生産性の改善でIITAと共同研究を行っており、2016年に日本熱帯農業学会賞を受賞しました。6年前からは日本熱帯農業学会長を務めており若手研究者の育成に尽力してきました。私は農業拓殖学科の目指した「世界の平和のために」という哲学を実践してきたつもりですが、21世紀の世界の農業は多くの問題を抱えたままです。農業拓殖学科の哲学は国際農業開発学科の後輩たちに受け継がれていくと思います。最後に、皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

今年度着任された新人教員の挨拶

— 第三の人生を東京で —

大前 英

2025年4月より、国際農業開発学科の嘱託教授に着任しました大前英と申します。2024年3月末に国際農林水産業研究センター（JIRCAS）熱帯・島嶼研究拠点（石垣島）で役職定年を迎えた後、第二の人生を民間開発コンサルタント、NTCインターナショナル株式会社に求め、昨年1年間は福島で、除去土壌の再生利用技術実証事業を実施・運営しました。福島では毎日、車で約1時間、山間を走った飯館村長泥地区で水稻、露地野菜やハウス花き栽培等を行いました。しばらくは福島暮らしが続くものと考えていましたが、その後いろいろと状況が変わり、この4月から東京農業大学で勤務させて頂くこととなりました。まさか私が大学で教鞭をとることになるとは想像すらしていませんでしたので、人の行く末は分からないものと、今は不思議な気持ちでいます。

私は1986年3月に信州大学農学部を卒業してすぐに青年海外協力隊に参加し、初めての海外で、開発途上国（バングラデシュ）の貧困と飢餓を目の当たりにしたのが、私のその後の人生の行く末を決める原点となりました。その後家族でニジェールに長期赴任した後、ナイジェリア、インド、ブルキナファソ、ガーナ、パラオ等で、マメ科等作物栽培や土壌肥沃度の改善に資する作物体系の開発や研究管理の仕事をJIRCASで行ってきました。JIRCASで一通り、自分が開発途上国の

ためにやるべき事をして定年を迎えましたので、これからの人生は、第二、第三の人生として、私が世のため人のためにやれる残されたことを自問自答しながら、何かしら形になるまでやることができると考えています。



4月に大学に勤務を始めてからはや3ヶ月が経ちました。今まで働いてきた勤務場所と大学とでは、似ているところもあれば作法の異なるところもあり、とまどいながらも違いを楽しみ、試行錯誤を繰り返しながら日々を過ごしています。大都会東京での单身生活も大きな変化の一つです。もしキャンパス内で、戸惑いながらうろろしている私をみかけましたら、「田舎者が大学に“適応”しようと四苦八苦しているな」と思い、静かに温かい目で見守ってやって頂けると幸いです。いずれは家のある石垣島に戻り、静かな余生を過ごすことになるかと思いますが、それまでの泡沫の時を、少しでも大学の発展や将来ある学生さんのお役に立てるよう尽力して参りたいと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。

— 雑穀に魅せられて —

玉木 陸斗

皆様、はじめまして。本年4月より、農村開発協力研究室の助手として着任いたしました、玉木陸斗と申します。これまで2年間、宮古亜熱帯農場にてムーンショットプロジェクト付の臨時職員として勤務してまいりました。このたび改めて自己紹介を兼ねてご挨拶させていただきます。

私は1998年3月、沖縄県那覇市に生まれ、幼児期は九州沖縄サミットの開催で急速に開発が進む名護市、その後引っ越しに伴い首里地区で高校卒業までを過ごしました。身近には自然や農業に親しむ機会が多く、日々の暮らしの中で触れてきました。

地元の農林高校に進学し、古典園芸のキク栽培や水稻栽培などに取り組みました。サトウキビ栽培以外の農業について学びたいと思い大学進学検討しました。農大農業工学科出身の恩師の影響が大きく、地域後継者推薦により農学部農学科に入学しました。大学入学後は、元植物園技術職員とともに植物園の管理に携わり、地域との関わりが増し農地を借りて伝統野菜を含むさまざまな作物の請負栽培をしていました。当時、植物園ではキヌアの栽培が行われており、そのご縁で山梨県上野原市を度々訪れるようになりました。上野原は雑穀の産地であることを知り、「シコクビエ」と初めて出会いました。その感動は今でも鮮明に記憶に残っています。

3年次に念願の研究室配属があり、私は作物学研究室に所属しました。また、当時開発熱作博士課程の先輩とともにミャンマー調査に同行し、現地で遺伝資源の探究や在来品種の多様性等について多くを

学びました。

この経験が、民族植物学という学問分野に強く関心を持つきっかけとなりました。その後は先島諸島を巡りフィールドワークに取り組みました。

2020年3月新型コロナウイルスの影響で卒業式も研究室単位で簡素に終わり、コロナ禍の中で自分の研究を模索する日々が続きました。ミャンマーでの調査で一緒にアワ研究の第一人者の河瀬眞琴氏が農学科に着任されており、学部研究生を経て、修士課程で学びました。「沖縄で収集されたアワの農業形質と種子調達から見る雑穀の多様性」をテーマにして研究活動を進める中では、思うような成果が得られず悩むこともありましたが、それらを含め多くの学びとなりました。

宮古亜熱帯農場で勤務しながら自身の研究も継続し、多くの試練の中で植物と人との関係性を深く考えるました。そんな中、雑穀の里帰り栽培や伝統文化の復興・継承の取り組みに関わる機会にも恵まれました。

これまでの経験を礎に、自然科学と社会科学の両端にかけた学際的な視点から研究に取り組みます。研究者としてまだまだ未熟ですが、これからも日々精進していきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。



第65期 会計収支決算

(令和5年10月1日～令和6年9月30日)

一般会計決算

収入の部	予算	決算	差異
1. 会費	795,000	600,000	195,000
卒業生	795,000	600,000	195,000
既卒者	0	0	0
2. 事業	200,000	170,000	30,000
ニュース広告	0	0	0
行事等収入	200,000	170,000	30,000
3. 寄付金等雑収入	10,000	48,863	▲ 38,863
4. 前年度繰越	1,057,290	1,057,290	0
合 計	2,062,290	1,876,153	186,137

支出の部	予算	決算	差異
1. 事業支出	650,000	440,615	209,385
総会費	200,000	181,635	18,365
新入会員歓迎会費	100,000	0	100,000
ニュース発行	120,000	106,040	13,960
拓友会賞	50,000	22,940	27,060
在校生への補助	180,000	130,000	50,000
2. 管理費	325,000	69,921	255,079
会議費	90,000	59,974	30,026
印刷費	5,000	0	5,000
交通費	30,000	7,000	23,000
通信費	50,000	0	50,000
消耗品費	50,000	2,947	47,053
雑給費	50,000	0	50,000
雑費	50,000	0	50,000
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	887,290	0	887,290
5. 次年度繰越金	0	1,165,617	▲1,165,617
合 計	2,062,290	1,876,153	186,137

特別会計決算

収入の部	予算	決算	差異
1. 前年度繰越	3,425,088	3,425,088	0
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	50	480	▲ 430
合 計	3,625,138	3,625,568	▲ 430

支出の部	予算	決算	差異
1. 次年度繰越金	3,625,138	3,625,568	▲ 430
合 計	3,625,138	3,625,568	▲ 430

第66期 会計収支決算

(令和6年10月1日～令和7年9月30日)

一般会計予算

収入の部	第65期	第66期	差異
1. 会費	795,000	720,000	75,000
卒業生	795,000	720,000	75,000
既卒者	0	0	0
2. 事業	200,000	200,000	0
ニュース広告	0	0	0
行事等収入	200,000	200,000	0
3. 寄付金等雑収入	10,000	10,000	0
4. 前年度繰越	1,057,290	1,165,617	▲ 108,327
合 計	2,062,290	2,095,617	▲ 33,327

支出の部	第65期	第66期	差異
1. 事業支出	650,000	650,000	0
総会費	200,000	200,000	0
新入会員歓迎会費	100,000	100,000	0
ニュース発行	120,000	120,000	0
拓友会賞	50,000	50,000	0
在校生への補助	180,000	180,000	0
2. 管理費	325,000	325,000	0
会議費	90,000	90,000	0
印刷費	5,000	5,000	0
交通費	30,000	30,000	0
通信費	50,000	50,000	0
消耗品費	50,000	50,000	0
雑給費	50,000	50,000	0
雑費	50,000	50,000	0
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	887,290	920,617	33,327
合 計	2,062,290	2,095,617	33,327

特別会計予算

収入の部	第65期	第66期	差異
1. 前年度繰越	3,425,088	3,625,568	200,480
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	50	50	0
合 計	3,625,138	3,825,618	200,480

支出の部	第65期	第66期	差異
1. 次年度繰越金	3,625,138	3,825,618	200,480
合 計	3,625,138	3,825,618	200,480

学科教員・学生の受賞記録

日本唾液ケア研究会：第3回日本唾液ケア研究会学術集会 ポスター賞受賞

曽根良太先生が、2024年11月23日（土）に神奈川歯科大学で開催された、日本唾液ケア研究会 第3回学術集会にて、ポスター賞を受賞しました。

タイトル：エリートバレーボール選手の強化遠征中の唾液中SIgAの特徴

発表者：曽根良太、眞下苑子、玉井伸典

発表日：2024年11月23日（土）

現在の学内の様子(国際センター,サイエンスポート)



▲ 国際センター(旧2号館跡地)



▲ サイエンスポート(旧1号館跡地)